

【論文】

博物館を活動の場とするボランティアの位置付け

The Position of the Volunteers' Activity in Museum

布谷 知夫*
Tomoo NUNOTANI

1. はじめに

多くの利用者が主体的に活動に参加するというスタイルの参加型博物館(布谷知夫 1998)を想定して具体的な課題を考えると、博物館の場を利用して行なわれるボランティアの問題が象徴的に浮び上がってくる。多くの博物館利用者がボランティア的に博物館にかかわろうとしており、この人達の意図を博物館として評価し、博物館の活動の中に位置付けることで、利用者の十分な満足感とともに、博物館の事業も大きな成果を上げることができると考えられる。しかしながら同じ意図の利用者に対しても、ボランティアの位置付けを明確に理論化しておかないと、一時的な利用であったり、博物館側の都合で労働力の提供を受けることにしかならない恐れがある。

博物館の場でボランティアについて論じられるようになったのはそれほど最近のことではなく、初期的な博物館ボランティア活動は、早いものでは戦前から行なわれていたという報告がある(日本博物館協会1988)。そしてボランティアが世の中で一般的な市民権を得るようになり、この10数年ほどの間には博物館の場でもボランティアに関する議論が行なわれている。しかし、議論の内容を見ると博物館でのボランティアに関しては、展示室での展示解説ボランティアの導入や組織化についての技術的な議論が大部分で、博物館という施設にとってのボランティアの位置付けにまで踏込んだ議論はあまり行な

われていない。

本研究では、一般的なボランティアや博物館の場で議論されてきたボランティアに関する議論を整理しながら、博物館の場で行なわれているボランティアの、博物館運営にとっての位置付けを明確にして、実際にボランティア導入をするにあたっての考え方を明らかにしようとするものである。

2. 一般的なボランティアの議論と博物館との関わり

我が国のボランティアの議論は1930年代ごろからはじまっており、第二次大戦の後から議論と共に実際に組織が作られ、その最初は愛媛県のボランティア組織であったということである(興梠寛 1994)。そして1960年ごろから全国的にボランティアの組織が作られていったようである。しかしボランティアの議論が主として社会福祉の世界で行なわれていたために、長い期間にわたって、ボランティアとは社会福祉の用語であるという認識が広がっている。もちろんボランティアに関する議論は、かなり幅広い分野について行なわれていたが、実際にボランティア活動が行なわれていたのは、やはり社会福祉の分野が中心であったということも事実であった。

また我が国に特有の事情として、伝統的な村社会の共同作業や戦時中の国策教育などの影響を受けて(根本弘 1988)、ボランティアとは「無償の自己

*滋賀県立琵琶湖博物館総括学芸員

平成10年8月18日受理

犠牲」的な活動あるいは「滅私奉公」というイメージが強かった。これは皆が同じように作業に参加して、労働力を提供することで、共同体の作業が成立する。したがって共同体を維持するためには、半強制力を持った活動に家族から代表が、あるいは全員が参加するのが当たり前、という暗黙の認識があり、そのような活動をボランティアとよび、また近代的なボランティア活動もその延長線上にあるものとするイメージが色濃く残っていたためである。また逆に社会福祉の現場でも、労働力を提供し、犠牲となって活動することで、全体を支えていく、というような気分がボランティアの側にもあったようである。

またもう一つのボランティアのイメージとして「おせっかい」ということがあげられる(筒井のり子 1997)。自己犠牲の裏返しとして、個人的な熱心さの余り、全体像や社会的な実情を理解しないままに活動に参加するという傾向を揶揄した言葉である。

これに対して、1970年代から1980年代にかけて、自然環境や公害に関わる市民運動の高揚とともに、市民運動としてのさまざまなボランティア活動が行なわれるようになり、ボランティアに対する考え方も、より幅広く考えられるようになってきている。

このような議論のなかでの現代的なボランティアのキーワードは「自発性、自己学習と自己実現、制度の改革」であるといわれている(早瀬昇 1994、筒井のり子 1997)。最近の日本海の原油流出事件や兵庫県震災に関わるボランティアの活動が注目をされ、ボランティア活動が市民権を得たような評価がされているが、このような例はボランティア活動の幅の広がりを示すと同時に、上にあげた三つのキーワードが具体的に実現されているものといえそうである。

このキーワードは「自己犠牲、おせっかい」とは正反対の概念であり、個人が自分の興味や好みを契機として活動に参加し、そのことで自己と共に社会を変革していこうとする意思を示すものである。また同時に、ボランティアを単なる手伝いであったり、便利な労働力の提供と捉えるのではなく、あくまで個人の主体的な行為であり、社会的な活動と位置付けようという議論であり、博物館のボランティアを考えるためにも、重要な視点であると考えられる。

ボランティアに関する議論は盛んであり、例えば

ボランティアに関する文献リストや主な文献集(高森敬久・小田兼三・岡本栄一 1974、小笠原慶彰・早瀬昇 1986、窓編集部 1994、辻智子 1997)などが作成されていることは、この世界での議論の活発さを反映しているものと考えられよう。そしてその内容を、教育学や社会学、あるいは、実践的な活動理論と非常に幅広いものが含まれている。

しかしこれらの文献の中ではタイトルからはその内容を類推することはできれないが、少なくとも博物館のボランティアをテーマとして論じている文献はほとんどない。例えば小笠原他(1986)ではおよそ600件の文献があげられているが、博物館でのボランティアを扱った論文はわずかに2編であり、他の三つの文献集ではまったく見られなかった。

もちろん博物館でのボランティア活動については幾つもの研究例があることはあきらかであり、これらの文献リストに博物館を扱う論文がないのは、逆に一般的なボランティアの議論と博物館でのボランティアの議論とは相互に議論が交流されていない、ということが改めて明らかになったということであろう。

以上のように一般的なボランティアに関連しては多くの議論がされ、近年の理論的な成果が上げられているが、博物館については同列では議論がされていない。これらの一般的な議論の成果は、博物館という場でのボランティアについて考えるためにも前提として考慮しておくべき内容が多いが、また博物館のボランティアに関連しては、このような議論とはまったく別個の課題があることも注意しておく必要があると考える。

例えば先に上げた三つのキーワードに関しては、博物館の場合にはかなり異なるものとしてとらえることが必要と考える。このキーワードの中で最も本質的なものは「制度の改革」ということであると思われるが、博物館のボランティアの場合には、参加するということに制度に関わる点が含まれるとはいうものの、それが本質ではないであろう。昔からの自発性というキーワードについてすら必ずしも本質とはいえない部分がある。すなわち博物館のボランティアは博物館からのよびかけによって始まり、博物館との関係で継続するという場合が多いと考えられるからである。したがって、博物館でのボラン

ティアの本質は自己実現或いは自己学習という点であろう。

博物館を利用する利用者は、何よりも自分が楽しみ、学ぶために博物館をたずねるのであって、誰かの役に立とうとして博物館に来るわけではない。また継続して博物館を利用し、或いは博物館の事業に協力をする場合も、あくまで自分が学ぶためであったり、ボランティアとして活動をする中で、博物館や人のためというよりも自分が学ぶためであるという目的が非常にはっきりしている場合が多い。博物館に対する労働力の提供といえそうな、例えば発送物の封筒詰めや発送作業のようなことすらも、その事業に関わる一連の情報収集や学習に関連するからこそボランティアとして参加するのであって、自発的な行為であるように見えても、実際には自己学習という目的が強い。この点が博物館でのボランティアについて考えるための重要な点である。

3. 博物館でのボランティアに関する議論

博物館でのボランティア活動については、日本博物館協会の『博物館研究』で多くの議論が行なわれており、また『月刊社会教育』などでも幾つかの論文が発表されている。これらの研究例を見ると、大きく三つのタイプがある。その一つは、アンケート調査などをして全国的なデータをまとめたもの、二つ目は具体的な博物館の現場でのボランティア導入と日常活動を紹介しながら、その課題や問題点などをまとめたもの、三つ目は博物館のボランティアの在り方などを論じたものである。

全国的なデータをまとめたものでは、日本博物館協会が二回のアンケート調査を行ない（日本博物館協会 1988、日本博物館協会 1993 a、日本博物館協会 1993 b）、その結果をまとめて発表している。1988年の調査で回答のあった1172館のうち、個人あるいは団体でのボランティアを導入している館の数は170館であった。また1993年のアンケート調査では、ボランティアを導入している博物館は、回答館1250館のうち、133館であったということである。この調査によれば、ボランティアを導入している博物館では、活動内容は学芸業務補助、来館者接遇、付帯活動補助、環境整備という幅の広い活動に参加しているということである。そして独自の組織

を作っている場合と、友の会や同好会、地域の婦人会などにその活動を依頼している場合などがある。そしてボランティアが増加傾向にあるものの、人的あるいは物的な課題が多いとしている。

日本博物館協会はこのアンケートの後にこれまでにボランティア導入の経験がある博物館265館に対してあらためて調査をして、結果の解析と共に、30館の博物館へのヒアリングを行なってかなり具体的な内容の報告（日本博物館協会 1993 c）を行ない、翌年には「導入の手引」（日本博物館協会 1994）を発行している。

これらの一連のデータでは、博物館の世界でのボランティア導入の現状はかなり詳しく説明がされているものの、博物館の活動にとってボランティアはどういう位置付けになるべきであるかという議論は行なわれていない。また活動内容では、一般的なアンケートの結果が非常に多岐にわたる活動が行なわれているような内容であったにもかかわらず、例えば上記30館へのヒアリングでは、やはり活動の中心は展示室での展示案内と補助活動が大部分で、その他には行事の補助やショップの補助などがあげられているが、その他の活動はあまり表現されていない。

全体での印象は、生涯学習の振興（生涯学習審議会答申 平成4年）ということを大義名分としてボランティアが導入されており、きわめて具体的な技術的課題については努力の結果が見られるものの、なぜボランティアでなければならないのかという博物館での内実はあまり議論がされていないように思える。

これに対して、博物館の現場からの報告が幾つか発表されている。しかしながらその多くは「ミュージアムトークを開始して」（岡田憲三 1995）、「ボランティアによるギャラリートークについて」（日比野秀男 1988、1989、1990）のように展示解説を中心としたものが多く、根元（1988）や国立科学博物館の教育ボランティア（1988）、田中（1989）、兵庫県立近代美術館（1991 a 1991 b）、藤本（1993）なども展示以外の分野の活動にも触れているが、基本的には展示解説業務が中心になっている。博物館のボランティアの活動分野は非常に幅広いものであることは先のアンケート結果などからも明らかであ

り、個別の博物館ボランティアについてもそういう趣旨で議論がされているにもかかわらず、引用した論文やその他の多くの先行研究に共通して見られるように、実際に具体的な話になると展示解説に話が集約してしまうということは、逆に博物館ボランティアという活動に対する理論的なあいまいさと、一種の決めつけがあるのではないかと考えている。これに対して田中（1998）は博物館のボランティアは展示以外の全ての活動分野で可能ではないかと問題提起をしている。

博物館学的なボランティア論は、もちろん幾つか引用した論文の中でも少しずつ触れられているが、それを目的としたものは大変少ない。吉武（1988）は博物館のボランティアを推進する立場からボランティア活動を博物館の事業として位置付けることが必要であること、そのことで負担が増えるという声に対しては、それはボランティアを館の省力化のためと考える誤りであって、社会教育事業として考えるべきと論じているが、博物館にとってのボランティアの位置付けについては触れていない。矢野（1993）は本格的にボランティアについて論じ、博物館の教育活動には参加者の興味の程度やかかわりの度合いについて発展段階があり、順に高度な段階に進んでいくように事業を組合わせていくものであり、ボランティアはその最終的な段階としてとらえることができ、その特徴を活かして友の会やサークル活動の中にボランティアを取入れることで博物館の活性化がはかれるとしている。荒井ら（1998）は実際のボランティア導入の経過を踏まえながら、博物館のボランティアは展示解説だけではなく、博物館の事業全体に導入が可能であること、そしてそれらの各事業の活動が有機的に結びついている部分があることを議論して、総合的なコーディネートが必要であることを述べている。また大堀（1997）は、ボランティアの導入によって博物館の活性化と利用者サービスの向上、博物館と利用者である地域住民をつなぐ役割を持つことができるとしており、石川（1996）もボランティア導入の具体的な課題の整理とともに、同様の位置付けをしている。

4. 博物館でのボランティアの在り方

博物館で行なわれるボランティアについては幾つ

かの議論が行なわれているが、すでに述べたとおり、生涯学習の手段として必要であるということは無条件の前提としながら、なぜボランティアを導入するのか、博物館にとってボランティアはどういう位置付けにあって、どういう役割を持つのかということ抜きにして、議論の方向が基本的に展示解説ボランティアの方法論に限られており、またどのように導入して組織化するかというような、組織論や技術論が大半であった。

ボランティアによる効果としては、博物館が活性化されていく（藤本正博 1993）、博物館と地域をつなぐ役割を持つ（大堀哲 1997）、学習した成果を社会に還元することができる（石川昇 1997）、などがあげられてきたが、ここからは博物館という場を活用する利用者の姿は分かりにくい。以下にボランティアとは博物館という場にとってどういう存在であるのかを考えてみたい。

1) 博物館の日常の活動はすべてボランティア活動にむすびつく

博物館の活動は、研究調査、交流サービス、資料整備、展示というような日常の事業が総合的に結びついて行なわれることに特徴がある。すなわち、研究の進捗によって情報発信ができ、その結果として資料が集まり、研究の成果を交流活動や展示活動に活かすことで、またあらたな研究テーマがあらわれ、人のネットワークが広がり、新しい資料も集まる。そのような総合的な活動の中で、多くの人々が博物館を利用する。したがって主体的な利用者の立場からすれば、最初は野外の観察会や展示を利用するだけであったとしても、興味を伸ばし、他のテーマの観察会への参加、あるいは研究会等への参加がしやすくなっていることで、より活発に、あるいは他の分野の活動にも参加しようという気持ちになりやすいのであろう。

ボランティアの活動の場が展示解説だけではないことは従来の議論でも明らかであり、実際にもさまざまなボランティア活動は行なわれているが（日本博物館協会 1993 a）、その実態はわかりにくい。しかし博物館のあらゆる活動の場に利用者を受入れることが博物館の一つの目標としてよいならば、博物館の事業に参加できるということは、当然のこと

として博物館のすべての活動の場でボランティアを受入れることを考えるべきであろう。博物館の日常活動への参加とボランティアとは表裏一体のことなのである。

実は多くの博物館では、ボランティアの受入れという意識ではなく日常的にボランティアの受入れを行なっているのである。同好会等が博物館の資料の整理をしながら自分たちの研究をおこなったり、昆虫や植物標本のマウントなどの作業を、自分の勉強のためということを手伝ってくれたり、企画展示の実施にあたっての準備の手伝い、観察会での名簿チェックなどを見兼ねて手伝ってくれたり、あげていけばきりが無い。このような博物館の日常活動の中で学芸員とともに博物館を利用している人達をボランティアと意識することはあまりないようである。しかし博物館の活動に参加する中で多くの博物館利用者はすでにボランティアとして活動しており、その中でもっとも組織化と研修が必要なのが、展示室での解説ボランティアであるために話題や議論になることが多かったであろう。したがって、ボランティアに関する議論は実は博物館の活動全体を、どのようにして、どの程度に公開していくか、別の言葉で言い換えるなら、どのようにして参加型の博物館にしていくかという、博物館の活動の本質に関わってくるような問題なのである。

また近年ではボランティア活動の一般化の中で、博物館をより積極的に活用し、ボランティアグループが博物館を活動の場とし、グループの主体性を持ちながらさまざまな活動に参加するような例も出てきている。(水谷 1998)。このような例は今後も友の会との係わりの中で増加していくと考えられ、逆に博物館の側のボランティア議論が求められていくと考えられる。

2) 博物館の利用者をすべてボランティアと考えることができる

利用者は博物館の持つ多くの機能を利用しているが、ボランティアを博物館にとってプラスになる人と考え、実はすべての博物館利用者は博物館にとってプラスになる存在であり、そのプラスの量が大きい小さいかという差しかないと考えられる。すなわち博物館の利用者はすべてボランティアとい

う範疇でとらえなおすことができる。

例えば展示室においてさえ、来館者から日常的に多くの情報を得ることができる。琵琶湖博物館の民家の展示では、民家の構造やおいてある民具について、滋賀県内の各地での事例などを来館者から教えてもらっており、或いは時としてまったくの他人どうしが民具に付いて説明をし合っていたり、小学生のグループに年配の人が昔のことを教えてあげたりというような、来館者どうしによる、ほとんど自然発生的な展示解説ボランティア活動が日常的に行なわれている。また丸子船という展示では、これまでもう丸子船を操ったことのある船頭はいないだろうといわれていたが、展示を見ながらこういう船に乗っていた、という人があらわれ、その人からいろいろと昔のことを聞く機会があった。展示室においてすらそうであり、博物館のどの事業に参加する人であっても、博物館からの情報の提供を受けると共に、利用者の側から博物館へ情報をもたらす、事業の進展に大きな協力をしてくれている場合が多い。

従って、博物館にプラスになる人のことをボランティアと呼ぶとすれば、博物館の利用者は本来的にすべてボランティアといえる存在であり、この用語と性格を考え直すことが必要になるであろう。これまでは大きなプラスとなる人をボランティアとよび小さなプラスとなる人を単なる利用者としてきたといえる。また個人的な活動ではなく組織化された活動だけをボランティアとよんできたために、組織の問題と認識され続けたと思われる。あるいは極端な場合には、博物館が自由に使うことのできる労働力としての利用者をボランティアと呼んできたのかもしれない。先に述べたように参加型を追求することとボランティアの存在とは、この意味においても同列の課題なのであり、どのような姿勢で利用者を受け入れるのかということは、博物館の運営と、どのような博物館を目指すのかという博物館の選択にとって非常に大きな課題である。

このようなボランティアの位置付けを行なうとすれば、ボランティアの問題というのは、個人的なボランティアを博物館運営にどう位置付けるのかということと、ボランティアをどう組織化するのか、というふたつの問題があるということになるだろう。

なお、利用者はすべてボランティアという考えは必ずしも新しい考えではなく、例えばエコミュージアムの中にくらす地域の住民はすべてボランティアと位置付けることができるという意見（岩橋恵子 1997）や、ゴミの分別をしている人はみんなゴミに関するボランティアをしているという意見（鶴丸高史 1994）などは同じ視点の考え方であろう。

3) ボランティア的な活動の二つのタイプ

博物館利用者個人の目的から区別すると、ボランティアには二つのタイプがあると考えられる。ひとつは自主的に自分の学習と結びついて博物館を活用するというタイプであり、もう一つは、自分が博物館を活用することで感じている楽しさを他の人にも感じさせてあげたいという気持ちで行なわれる活動である。

例えば博物館の標本を利用する場合は、博物館の資料を使って卒業論文を書くために博物館に通って、資料の整理をしながら研究をするというような場合がある。また同好会や研究会の活動をすすめるための過程で、博物館の資料を整理したり、ラベル作りを手伝ってもらうような場合がある。このような例では利用する側は自分たちの活動を行なうためであったり、自分の研究のためであったりしながら、結果としては博物館の資料整理を手伝ってくれていることになっている。最近では標本を触ることで自分の勉強をしたいという気持ちから博物館の資料の整理を手伝ってみたいという人が増えている。博物館が行なう大規模な参加型調査に参加する場合や博物館が準備をしてすすめる研究会への参加なども、おそらく参加者が自分の興味や好奇心、あるいは向学心が動機となって博物館を利用しようとし、その過程で博物館の側には資料の整理が進んだり、新しい資料の蓄積や情報の蓄積が進むという効果もたらされている例といえる。博物館ボランティアとして最も一般的に議論がされている展示解説ボランティアも、前提として行なわれている研修を通じて、自分自身が学び、また展示解説を行なうことで新たな疑問を生じて、それについて学びなおすという作業の楽しさや、展示解説をしながら対話の中で学ぶことの楽しさから行なわれるといっても良い。これまでこの様な展示解説以外の一般的な博物館の機能の

活用はボランティアとは位置付けてこなかった。しかし自己学習という言葉で括ることができ、博物館にとっては大変にプラスになる活動としてすべてボランティア活動の中に位置づけることができるであろう。

それに対して、例えば野外観察会やシンポジウムなどでの裏方的な仕事や受け付けなどを行ったり、博物館の事業を進めるためのさまざまな発送物の発送作業、図書整理などにもなる仕事、最近ではデータの入力やホームページの管理などにもなる仕事を博物館利用者にしてもらうという場合がある。この様な例は参加者が学ぶという側面ももちろん含まれているが、どちらかという利用者の好意で博物館が一方的に協力をしてもらうボランティアであり、先に述べたように利用者自身が自分の博物館利用の楽しさを人に伝えるために、宣伝役をかってでてくれているということになるだろう。そしてこのようなボランティア活動では、きわめて作業的な内容を含むことが多いために、ボランティアは一方的な労力提供ではないといいながらも、実際の博物館の現場ではボランティアは博物館の仕事を手伝ってくれる人というように考えられることが多かったのではないだろうか。

これまでの博物館のボランティアの議論では、このなかの作業の面だけが表にでてくる場合が多かったと思われる。しかしそこからはなぜ人が博物館のボランティアをかってでるのかは見えてこない。それは人が博物館という場を利用して活動をし、その楽しみを人にも伝えたいという考えから博物館への一方的な労力提供をすらしめてくれる、ということであろう。

そしてこの様な整理から、ボランティア活動というものが博物館にとってどうプラスになり、利用者にとってどうプラスになるかという関係を明らかにすることができる。

4) 博物館ボランティアは自己学習の要素が強い

一般的なボランティアのキーワードは「自発性、自己学習、制度の変革」であるのに対して、博物館のボランティアは自己学習という面が強いということはすでに述べた。本来自発的な活動でありながら、博物館という場の持つ機能を活用し、また博物館の

学芸員との関わりの中かで行なわれる活動であるために、もちろん自発性がなければできない活動ではあるが、自発性だけでは成立しない活動である。

それに対して、自己学習という点から見ると、博物館としての対応に一つの課題が生じる。学ぶことを目的としたボランティアの場合には、学んだ結果として成長するということが自覚できるようにしておくことが欠かせないだろう。一時的には満足できても、同じことが長く続く中では、新しい情報や発展性があること、事業の全体がわかり、また利用者の主体性も認められること、単独で切れてしまっている事業ではないことがわかる中で、成長していくという自覚が持てる状態を博物館の側が準備しておくことが受入れる側の条件だろう。

例えば展示解説のボランティアであれば、日常的な研修や資料の提供、ディスカッションなどを行なって、ボランティアの側が展示解説をすることで学ぶことができるということが分かりやすいように配慮をすることが大切である。同じような配慮は、博物館のどの事業であっても必要で、事業に参加したことで関心が広がり、好奇心が刺激され、博物館の他の事業にも関心を向けることができるようにし、そのような新たな関心を持った場合には、別の事業でも受入れることができるような体制を準備しておくということも含まれる。

そしてそのような受入れ体制とは、博物館のすべての事業で参加できる余地を作り、ボランティアとして受け入れることができるような博物館の総合的な事業展開をすることで保証される。

5) ボランティアの活動によって博物館自体が成長する

ボランティアを活用する理由として、生涯学習施設という立場から、利用者の自己実現や成長ということがあげられている。しかし同時にボランティアの活動によって、博物館自身が成長していくということに注目すべきである。

もちろん博物館の事業の一部を利用者の手をかりて行なうわけであり、ボランティアの力で事業が進んでいくということは明らかである。しかし現実にはボランティアを受け入れることでおこる、受け入れ側の仕事量の拡大ということも事実であり、その

ことが理由でボランティアを考えないという博物館もある（日本博物館協会 1988）。したがって博物館利用者の姿だけを基準にして考えると、博物館が成長するということは言いにくい場合もあるかもしれない。

しかしボランティアが個別の一時的な活動であるのに対して、博物館の活動は恒常的であり、発展性がある。つまり、受け入れ体制としてどの事業においても発展的にボランティアを受け入れる体制を作ることができた場合も、その各事業が実際に活用されることで始めてそういう体制を作ったことが生きてくるわけである。理論的な博物館のあるべき姿は、その状態を活用することができる人々の存在によって始めて現実のものとなる。そういう意味では、博物館は、利用者に利用されることで初めて現実のものとなり、利用の結果として博物館自体が成長し発展することができるようになっていく。

6) 博物館の利用者全体の整理

博物館にプラスになる人はすべてボランティアと考えるべきであり、そういう意味では博物館利用者は全員がボランティアといえると述べた。しかし同時に博物館に対するプラスの大きさを評価すべきであろう。展示を見て何らかの情報を残すというようなプラスから、博物館のコレクションを整理して資料目録を作ってしまう、というようなプラスもある。そして博物館としてはまた、そういうプラスを個別に考えながら、博物館に関わる各個人が、小さなプラスから少しずつでも大きなプラスをもたらす存在として博物館と付き合い合ってくれるように、その筋道を作っていくことが求められるであろう。そのことは利用者から見れば、よりやりがいがあり楽しい活動に参加していくことができるような活動が準備されているということになるであろう。そのような博物館側の作業として、博物館に関わるすべての人の関わりかたを人のグループごとにまとめて範疇化し、そのタイプごとにどのように博物館からの情報を提供するか、博物館利用の窓口をどう準備するのか、を十分に考えておくことが必要であろう。

7) ボランティアの活動は強制できない

博物館のボランティアを利用者の活動と位置付け

るとすれば、当然のこととしてボランティア活動には博物館からの強制力は入る余地はない。もちろん一般的にもボランティア活動は自主的な活動であり、強制力のない活動であるが、博物館の場合にはそのことを博物館の側がより強く意識しておかないと強制力を生じてしまう恐れがある。

例えば一般的にはボランティアといえども活動を始めた以上は責任が生じて強制力があるような議論がされる場合がある。しかし博物館のボランティアの場合には、どのような場合であっても、途中で活動を止めてしまう個人を非難することはできないであろう。博物館での活動が楽しくなければ、自己学習に役立たないと思えるようであれば、止めてしまうのは当然であるからである。もちろん約束ごとに対する責任や倫理は生じるであろうが、博物館の側からそのことを問題とするという姿勢は、ボランティアを労働力として期待するという発想につながっていくと考えられる。期待していた作業に欠員がでるといことは博物館からみれば技術的な問題であり、博物館の側で解決していく課題である。ボランティアがやめていくとすれば、利用者であるボランティアの責任ではない。多くの場合は博物館のマネジメントの問題である。

8) 博物館の場ではボランティアという用語はふさわしくない

博物館の場でのボランティアについて述べてきたが、一般的なボランティアと較べて博物館でのボランティアはかなり性格の異なる部分があることはあきらかであろう。それは博物館という機関に結びついて、その活動と表裏の関係で行なわれる活動であるために、利用者が博物館を利用するという本来の機能が同時にボランティアの活動にもあたるという博物館活動の特殊性に基づくものである。

しかしこれまでも適当な用語がないままにボランティアという用語が使用されてきた。この用語が世の中でより市民権を持ち、使用されるようになりつつある中で、博物館でこの用語を使うことで、ボランティアとは特別に大きなプラスをもたらす人というイメージが残り、その博物館としての本質がますます曖昧になってしまうように思われる。利用者がいてその利用者が博物館を利用するということが、

博物館の根幹の精神であり、そのような利用者によってはじめて博物館は成立する。この利用者をボランティアという用語でまとめることは誤解の元になるのではないか。したがって、博物館の利用者を博物館へのプラスの大きさと組織化の程度によって一定の区別をしながら、特に博物館運営の立場で考える場合には、博物館に係わる人に対する用語として、ミュージアム・パートナーあるいは単にパートナーを使用してはどうであろうか。

5. まとめ

博物館の世界でも近年に話題になることが多いボランティアの博物館活動のなかでの位置付けについて、いくつかの視点からの議論を行なった。博物館のボランティアは一般的なボランティアの位置付けとはかなり内容や意味合いが異なるものであるため、一般的なボランティアに関する議論や理論化の進展に学びつつも、博物館ボランティアについては独自の理論化が必要である。これまで博物館のボランティアについては、議論の内容としては多様なボランティア活動について扱われながら、博物館という場を利用して行なわれるボランティア活動の博物館としての位置付けは非常に曖昧なものであった。そのため博物館の事業展開の中でボランティアとはどのような存在と考えるべきであるかを考察した。

博物館におけるボランティア活動を博物館の事業の発展にプラスになる活動と位置付けるならば、博物館の利用者はすべて博物館にとってはプラスになる存在であり、利用者はすべてボランティアと考えられる。すなわち、博物館はそのすべての事業の分野において利用者の利用を得て、総合的に発展していく組織であり、積極的な利用者を受け入れる体制を作り、その利用をはかる受け皿を常に準備しておくことが必要であり、その利用者の位置付けは博物館の日常活動の基本となる。その意味では、利用者の参加を意識した博物館をめざすのであれば、ボランティアの位置付けと対応こそもっとも本質的な課題といえるかもしれない。またボランティアという用語自体も一般的な用語とはかなり異なってきたために、誤解を避ける意味で、違った用語で呼ぶべきであろう。そのひとつの例としてミュージアム・パートナーという用語を提案した。

このような課題整理をせずにボランティアへの対応を行なうと、実質的にはボランティアを単なる労働力の提供として扱うことになってしまう危険がある。

本研究では位置付けの整理を目的として、導入のための具体的な課題や技術的な問題についてはまったく触れなかったが、実際のボランティアの導入にあたっては、個人的な活動参加の受け入れは従来の通りに行ないつつ、同時に組織化できる活動を整理して個別に実施に向かう努力を行なうことが必要であろう。そして現実には組織化する個人、あるいは長期的に博物館に関わってくれる個人、そして比較的一時的に関わる個人など、個別には対応は異なるだろうが、その対応の根幹の考え方は、博物館を利用する人という立場を離れないことである。利用者としての立場を残しながらも、従来のプラスになる人としてのボランティアをどの事業分野では、どの程度に導入できるのかを具体的に検討し、その見直しの中で、個別の博物館の事情にあわせて、事業ごとに利用者がより博物館の側にたつて主体的に参加ができるようなシステムを考えながら、利用者を受け入れるための制度化などを図るという方向性が考えられるであろう。

筆写が所属する琵琶湖博物館では、将来のボランティアの導入にむけてボランティアに関する議論を行なっている。本研究は、琵琶湖博物館での議論と並行して、個人的な考えをまとめたものである。議論の相手をしていただいた琵琶湖博物館のスタッフに感謝したい。

文 献

荒井一政・勝山輝男・田中徳久・奥野花代子(1998) 博物館ボランティア活性化に関する調査研究 平成7～9年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書 7-19
藤本正博(1993) 自己実現をめざすボランティア活動 Museum Data (24) 1-4
早瀬 昇(1994) 変りはじめたボランティア 「正しき志向」から「楽しき志向」へ 窓 窓社 (20) 18-23
日比野秀男(1988) ボランティアによるギャラリートークについて(上) 博物館研究 23 (11) 12-19

日比野秀男(1989) ボランティアによるギャラリートークについて(中) 博物館研究 24 (6) 8-12
日比野秀男(1990) ボランティアによるギャラリートークについて(下) 博物館研究 25 (2) 8-13
兵庫県立近代美術館(1991a) 兵庫県立近代美術館におけるボランティア活動状況 博物館研究 26 (6) 12-16
兵庫県立近代美術館(1991b) 兵庫県立近代美術館におけるボランティア活動状況 博物館研究 26 (7) 10-13
石川 昇(1997) 市民が運営に参加する 日本博物館総覧 東京堂出版 26-27
石川 昇(1996) ボランティア ミュージアムマネージメント 東京堂出版 266-273
岩橋恵子(1997) フランスにおける博物館運動とボランティア ボランティア・ネットワーキング 日本社会教育学会編 119-128
国立科学博物館教育部(1988) 国立科学博物館における教育ボランティア制度の現状と課題 博物館研究 23 (11) 25-28
窓編集部 1994 ボランティアに関する文献集 窓 窓社 (20) 139-152
水谷 綾(1998) 社会教育施設におけるボランティア・マネージメント 月刊ボランティア (334) 4-11
根元 弘(1988) ボランティアについて 博物館研究 23 (10) 35-38
日本博物館協会(1988) 博物館のボランティア実態調査報告(1) 博物館研究 23 (10) 30-34
日本博物館協会(1993a) 博物館のボランティア活動について(1) 博物館研究 18 (5) 15-20
日本博物館協会(1993b) 博物館のボランティア活動について(2) 博物館研究 18 (6) 4-10
日本博物館協会(1993c) 博物館ボランティア活性化のための調査研究報告書 日本博物館協会 152pp
日本博物館協会(1994) 博物館ボランティア導入の手引 日本博物館協会 106pp
興沼寛(1994) ボランティアの歴史から考える 窓 窓社 (20) 104-116
布谷知夫(1998) 参加型博物館に関する考察 琵琶湖博物館を材料として 博物館学雑誌 23

(2) 15-24

小笠原慶彰・早瀬昇(1986) ボランティア活動の
理論Ⅱ 74-84活動文献資料集 社団法人大阪
ボランティア協会 321pp

岡田憲三(1995) ミュージアム・トークを開始し
て 博物館研究 29(2) 10-13

大堀 哲(1997) 新しいミュージアム・トレンド
日本博物館総覧 東京堂出版 4-24

高森敬久・小田兼三・岡本栄一(1974) ボランティ
ア活動の理論 ボランティア活動文献資料集
社団法人大阪ボランティア協会 307pp

田中克郎(1989) 岡山県立美術館におけるボラン
ティア 博物館研究 25(8) 16-20

田中徳久(1998) 生命の星・地球博物館の博物館

ボランティア 神奈川県博物館協会会報 (69)
53-66

辻智子(1997) 資料編 ボランティア・ネットワー
キング 生涯学習と市民社会 日本社会教育学
会226-238

鶴丸高史(1994) ボランティアという概念のない
世界を求めて 窓 窓社 (20) 43-51

筒井のり子(1997) ボランティア・コーディネー
ター その理論と実際 大阪ボランティア協会
230pp

矢野牧夫(1993) 「ボランティア活動」と「友の
会活動」 博物館研究 28(2) 9-15

吉武弘喜(1988) 博物館におけるボランティア活
動について 博物館研究 23(9) 3-7